様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００２７２

研究課題名（和文）事例研究と連携させた1970年代以降の日本現代ミステリ史の構築

研究課題名（英文）Construction of the history of modern Japanese detective novels since the 1970s in collaboration with case studies

研究代表者
押野　武志（Oshino, Takeshi）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：７０２７００３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　1970年代から本格化し、メディアミックスとして展開する今日のミステリの特性を踏まえつつ、謎の生成をジャンルに内在する言語芸術の可能性の追求と捉える観点を導入することに成功した。さらに、地域コンテンツとしてのミステリの特質を北海道を事例研究として明らかにした。70年代以降のツーリズムとトラベルミステリの成立との相関性、ミステリの虚構化の方法と風土との関連性など、ミステリと北海道を接続させることで、社会学・観光学・歴史学などとも交錯する文化史研究へと発展させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現代ミステリは、学術研究対象の端緒となったばかりで、包括的なジャンル論及び史的研究はまだなされていない新領域であり、その成立と再編過程を通時的・総合的に究明することができた。北海道を具体的事象の一例としてミステリ研究とミステリ概念の変容との相即的関係を同時代言説との関係性において明らかにする言説分析でもあり、歴史学や社会学、観光学などの隣接学問の研究成果を取り込んでいる。語り論や虚構理論など、これまでの文学研究の蓄積を応用しつつも、文学研究の対象を同じ方法を用いて単に広げるだけでなく、ジャンルやメディアの特性をも明らかにするメディア研究、映像研究としても意義がある。

研究成果の概要（英文）：　Based on the characteristics of today's mystery, which began in earnest in the 1970s and developed as a media mix, we succeeded in introducing a perspective that regards the generation of mysteries as the pursuit of the possibilities of linguistic art inherent in the genre. Furthermore, the characteristics of mystery as regional content were clarified as a case study in Hokkaido. By connecting mystery and Hokkaido, such as the correlation between tourism and the establishment of travel mystery since the 1970s, and the relationship between the method of fictionalization of mystery and the climate, it also intersects with sociology, tourism, history, etc. It was able to develop into cultural history research.

研究分野：日本近代文学

キーワード：ミステリ　北海道　地域コンテンツ　メディアミックス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

サブカルチャーと文学との交渉関係史を研究する中で、「1970 年代」と「ミステリ」が重要であることを認識した。また、本共同研究のメンバーは、北海道在住者、もしくは、北海道出身者で占められている。このメンバーは、これまでも、柄刀一、大森葉音、松本寛大、浅木原忍といった北海道在住のミステリ作家たちとの読書会や座談会などを行ってきた。その成果の一部は、押野武志・谷口基・横濱雄二・諸岡卓真編著『日本探偵小説を知る―一五〇年の愉楽』（2018、北海道大学出版会）に収録された。ここからさらに発展させ、実作者と連携した地域文化研究とミステリ史とを接続してみたいという着想を得た。

1920 年代の江戸川乱歩の登場から、1950 年代から 60 年代にかけての松本清張の登場、および社会派推理小説の流行までは、ある程度、歴史化の作業は済んでいるが、70 年代以降、現在に至る現代日本のミステリは、いまだに史的に位置づけられていない。また、北海道を舞台、素材、モチーフにしたミステリは、「北海道文学」という枠内で論じられたことがない。このような現状に鑑み、それを打開すべく本研究は、スタートした。

## ２．研究の目的

本研究は、1970 年代以降今日までの日本のミステリの特質を、他ジャンルの文学との関係だけでなく、映画をはじめとする視覚メディアとの錯綜した交渉関係にも着目しながら分析する史的研究である。70 年代から本格化し、今日に至るメディアミックスとして展開するミステリの特性を踏まえつつ、謎の生成をジャンルに内在する言語芸術の可能性の追求と捉える観点も導入し、純文学、幻想文学、ＳＦといった周辺のジャンルを取り込んだ、総合的な現代ミステリ史の構築という課題に取り組む。

それと並行して、北海道に特化した地域コンテンツとしてのミステリの特質を共通の事例研究として明らかにする。70 年代以降のツーリズムとトラベルミステリの成立との相関性、ミステリの虚構化の方法と風土との関連性など、ミステリと北海道を接続させることで、社会学・観光学・歴史学などとも交錯する文化史研究へと発展させる。

また、北海道は、谷譲次、久生十蘭、渡辺温、水谷準などミステリ創期に活躍した戦前の作家から、佐々木譲、東直己、鳴海章、柄刀一、京極夏彦、馳星周、佐藤友哉などの現役作家まで、日本のミステリの一翼を担ってきた多様な作家たちを輩出してきた。とりわけ、札幌冬季オリンピックの開催（1972）以降、札幌を舞台としたミステリが現在まで多く書かれ（それ以前では、松本清張『点と線』〈1958〉と佐野洋『一本の鉛』〈1959〉などがあるのみ。）、視覚メディアにも原作を提供しており、今日の文化の特質である様々なコンテンツと地域との関係性を明らかにする事例研究として、本州とは異なる風土と歴史性を有する北海道は最適である。北海道に着目する理由は他にもある。小笠原克らによる『北方文芸』（1968-）やアイヌ初の近代小説家である鳩沢佐美夫らの『日高文芸』（1969-）など、60 年代から 70 年代にかけて、北海道開道百年（1968 年）や札幌オリンピックの開催も背景に「北海道文学」ブームが起こり、全国初の地方文学全集『北海道文学全集』全 22 巻（1979 年～81 年、立風書房）の刊行に結びつく。中央に対する地方、ハイカルチャーに対するサブカルチャー、マイノリティ文化の再評価など、70 年代以降の日本の文化や思想の動向を、北海道とミステリの双方に着目することで、具体的な相において究明することが可能となる。

## ３．研究の方法

1970 年代以降今日に至るミステリと他ジャンルとメディアとの相互交渉史を段階的に新しい方法論によって分析すると同時に、明確なパースペクティブから、他ジャンルとの交渉関係を踏まえ、同時代言説とメディアとの相互葛藤的なミステリ史記述を目指す。その目的のため、以下の 3 点に焦点を絞りながら研究をすすめていった。

### (1) ジャンルの再定義と分析概念の精緻化／評論と文学研究との往還

「ミステリ」は、広義にはエンターテインメント一般を指し、狭義には論理的謎解きを中心とする「本格探偵小説」という意味でも用いられる。こうした概念が拡散化するのは、70 年代以降である。「社会派推理小説」「ハードボイルド」「アンチミステリ」「サスペンス」「新本格ミステリ」「脱格ミステリ」「日常の謎ミステリ」等の呼称やサブジャンルの成立の背景と関連性を明らかにして、日本のミステリの歴史的文脈の広がりとその特殊性を浮上させる。そのためには、「トリック」概念の再定義、本格／変格の二分法の再検討、謎解きをめぐる論理性の哲学的考察など、新たな分析方法と分析概念の創出を目指した。

さらに、本格ミステリにおいては、江戸川乱歩や都筑道夫など、作家としても評論家としても活躍する人たちが多数存在する。80 年代の「新本格」以降のミステリ評論の土台を作ったのも、島田荘司、笠井潔、法月綸太郎らの実作者である。また、「大戦間探偵小説論」や「後期クイーン的問題」といったトピックを中心に、評論に対する実作での応答も盛んに行われており、他ジャンルと比較しても両者は緊密な関係にある。北海道在住のミステリ作家たちの多くも、実作と

評論の双方で活躍している。実作と評論、あるいは評論と文学研究とを往還させ、ミステリを作家論・作品論双方から多角的に検討した。

（2）地域コンテンツとしてのミステリ／北海道を対象にした事例研究
ミステリに限らず、今日ではさまざまな作品で映画・ドラマ・漫画・ゲームなどへのメディアミックス展開がなされる。近年これら作品の舞台となった場所を訪問するファン行動が盛んとなる一方、訪問される側がこれを利用して地域振興を図る事例も数多く見られる。本研究では、メディアミックスによるミステリの拡散化と大衆化の過程で読者のミステリ受容がどのように変容したのかについて、地域コンテンツという観点に立ちながら、北海道の事例を取り上げ、マルチメディアとしてのミステリの社会的な役割の変遷をたどった。

（3）体系的な文学史の構築／70 年代以降の現代ミステリの展開
ジャンル横断的な研究であることを担保しつつ、ミステリ史の構築に当たっては、以下のようなパースペクティブと 10 年単位のスパンで、体系的に記述することを目指した。

①70 年代――横溝正史再評価の背景と『幻影城』（1975～1979）からデビューした泡坂妻夫・栗本薫・田中芳樹・連城三紀彦らのミステリの特質。

②80 年代――島田荘司『占星術殺人事件』（1981）以降の本格ミステリ再評価の流れと東野圭吾・綾辻行人・折原一・法月綸太郎・有栖川有栖・宮部みゆき・北村薫・山口雅也・我孫子武丸らのデビュー作の位置づけ。

③90 年代――京極夏彦『姑獲鳥の夏』（1994）の衝撃と、その流れを汲むメフィスト賞受作家（清涼院流水・舞城王太郎・佐藤友哉・西尾維新ら）の特質。

④00 年代――サブカルチャーとミステリとの親和性や SF 的設定、特殊ルール下におけるミステリの登場の背景とグローバリズムにおけるミステリの位置づけ。

４．研究成果
現代ミステリは、学術研究対象の端緒となったばかりで、包括的なジャンル論及び史的研究はまだなされていない新領域であった。そのため、本研究は、1970 年代以降のミステリの成立と再編過程を通時的・総合的に究明した。ミステリというジャンルは、大衆文学／純文学、サブカルチャー／カルチャーといった二項対立の新しい線引きと再編に関わり、流動的で境界的なジャンルである。60 年代の松本清張文学をめぐる「純文学変質論争」以降空白となっている、現代ミステリの歴史化の作業を通して、現代日本文学の歴史を俯瞰的に照射することができた。
さらに、1970 年代以降のミステリ史の再構築と並行して、北海道に特化した地域コンテンツとしてのミステリの特質を共通の事例研究として明らかにした。70 年代以降のツーリズムとトラベルミステリの成立との相関性、ミステリの虚構化の方法と風土との関連性など、ミステリと北海道を接続させることで、社会学・観光学・歴史学などとも交錯する文化史研究へと発展させた。
現代ミステリの特質をジャンル内部の事象だけに着目して分析するのではなく、純文学・SF・ライトノベル・映画・漫画・アニメといった対象の脱領域性によって明らかにし、1970 年から現代までを視野に入れた巨視的で通史的な文化研究となった。北海道を具体的事象の一例としてミステリ研究とミステリ概念の変容との相即的関係を同時代言説との関係性において明らかにする言説分析でもあり、歴史学や社会学、観光学などの隣接学問の研究成果を取り込んでいる。語り論や虚構理論など、これまでの文学研究の蓄積を応用しつつも、文学研究の対象を同じ方法を用いて単に広げるだけでなく、ジャンルやメディアの特性をも明らかにするメディア研究、映像研究としても意義があった。
押野武志（研究代表者）は、70 年代から 80 年代のミステリを中心に叙述トリックの史的展開を究明しながら、北海道文学史を再構築した。具体的には、『幻影城』掲載のミステリの中でも、竹本健治のアンチミステリ『匣の中の失楽』（1978）に着目し、筒井康隆、後藤明生、村上春樹らの小説に見られるメタフィクション構造との関連性を明らかにした。その上で、佐藤友哉の札幌郊外を舞台にしたミステリ群における暴力表象を北海道文学史やプロレタリア文学史の中で位置づけた。上述の課題を体系的に記述するために、「フラット」という分析概念を提出した。
横濱雄二（研究分担者）は、1970 から 80 年代のミステリを中心に、メディアミックスを踏まえ、地域コンテンツに関する研究を行った。まず、横溝正史作品を題材に、原作小説から漫画、映像などへ展開するメディアミックスについて具体的に検討した。さらに、設立メンバーでもある地域コンテンツ研究会（2012-）と連携しつつ、北海道を舞台とするミステリの映像化作品を題材に、ロケ地訪問等のファン活動を含めた、地域コンテンツとしての側面を分析した。この際、メディアミックス展開における諸媒体の作品全体に通底する想像力のあり方として物語世界を措定したうえで、各媒体や地域コンテンツの想像力のあり方を相互に比較検討して、それらの関係性を理論化した。
諸岡卓真（研究分担者）は、1980 年代後半から 2000 年までを対象に小説以外のメディアを

含めたミステリジャンルの編成過程と、札幌を舞台にしたミステリ作品についての基礎研究を行った。まず、「新本格」草創期に「名探偵コナン」（1993-）など、小説以外のメディアで重要なミステリ作品が登場したことを踏まえ、メディアの動きも視野にいれながら「新本格」草創期のミステリ史を再構築した。次に、同時期に急増した札幌を舞台にしたミステリ、内田康夫『札幌殺人事件』（1994）等に注目し、メディアミックス的展開も踏まえながら、札幌ミステリ研究の基礎となるデータベースや理論の構築を行った。

井上貴翔（研究分担者）は、2000 年以降のミステリの拡散化と集中化のプロセスを追った。メディアミックスやライトノベル、ライト文芸の隆盛などによる拡散化のなかで注目を集める「推理」ないしその行為に着目し、本格ミステリにおける「推理」への眼差しの変遷や「推理」を特殊能力とみなす作品の系譜などを分析した。さらに、作品の諸相とソーシャルメディアなどの情報環境との関わりを考察することで、メディア論的な視座からこの時代のサブカルチャーとミステリとの関連性を明らかにした。また翻って、ミステリから SF に至る幅広い作品を発表している北海道出身作家らにおける「推理」の系譜を通史的に検討した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>押野武志 | ４．巻<br>－ |
| ２．論文標題<br>本格ミステリから読む村上春樹―〈アフターダーク〉から〈ビフォーダーク〉への移動 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>2019年第8回村上春樹国際シンポジウム　国際会議予稿集 | ６．最初と最後の頁<br>11－18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>押野武志 | ４．巻<br>－ |
| ２．論文標題<br>災害とミステリ | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>2019年度輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム　予稿集 | ６．最初と最後の頁<br>1－10 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>横濱雄二 | ４．巻<br>79 |
| ２．論文標題<br>映画『砂の器』における異界 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>昭和文学研究 | ６．最初と最後の頁<br>30－41 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>横濱雄二 | ４．巻<br>101 |
| ２．論文標題<br>地域コンテンツ研究と地域表象 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>日本近代文学会 | ６．最初と最後の頁<br>272－278 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>横濱雄二 | ４．巻<br>67 |
| ２．論文標題<br>『火垂るの墓』の想像力―防空壕の池をめぐって | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>甲南国文 | ６．最初と最後の頁<br>77ー88 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>押野武志 |
| ２．発表標題<br>本格ミステリから読む村上春樹―〈アフターダーク〉から〈ビフォーダーク〉への移動 |
| ３．学会等名<br>2019年第8回村上春樹国際シンポジウム（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>押野武志 |
| ２．発表標題<br>災害とミステリ |
| ３．学会等名<br>2019年度輔仁大学日本語文学科国際シンポジウム（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>横濱雄二 |
| ２．発表標題<br>焼跡と池―『火垂るの墓』の物語化をめぐって |
| ３．学会等名<br>早稲田大学国語教育学会第282回例会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>諸岡卓真 |
| ２．発表標題<br>奪われる推理――米澤穂信『愚者のエンドロール』論 |
| ３．学会等名<br>日本近代文学会北海道支部例会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>井上貴翔 |
| ２．発表標題<br>探偵小説における推理と科学捜査――三津木春影と横溝正史の比較を端緒に |
| ３．学会等名<br>日本近代文学会北海道支部例会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>押野武志 |
| ２．発表標題<br>佐藤友哉における北海道表象 |
| ３．学会等名<br>「事例研究と連携させた1970年代以降の日本現代ミステリ史の構築」第1回研究報告会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>横濱雄二 |
| ２．発表標題<br>社会とミステリの関わりを考える―古橋信孝『ミステリーで読む戦後史』に寄せて |
| ３．学会等名<br>「事例研究と連携させた1970年代以降の日本現代ミステリ史の構築」第1回研究報告会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>横濱雄二 |
| ２．発表標題<br>異界のメロドラマー映画『砂の器』のアダプテーション |
| ３．学会等名<br>「間メディア性を意識したメロドラマの文化史構築に関する基礎的研究」第4回準備研究会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 横濱　雄二<br>(Yokohama Yuji)<br>(40582705) | 甲南女子大学・文学部・教授<br>(34507) | |
| 研究分担者 | 諸岡　卓真<br>(Morooka Takuma)<br>(40528246) | 北星学園大学・経済学部・准教授<br>(30106) | |
| 研究分担者 | 井上　貴翔<br>(Inoue Kisyo)<br>(70770551) | 北海道医療大学・看護福祉学部・講師<br>(30110) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|